

ひと・夢・まち 町長コラム

紙書籍のぬくもり…（令和5年8月号）

自宅の書棚にふと目をやると、懐かしい背表紙が目に入ってきた。色あせた表紙、そしてタイトルには今『地球』が危ない」、その日その時になぜ目に留まったのかは定かではないが、手に取り開いてみた。

34年前に発行された書籍で、私が30歳を過ぎたころに求めたもののようだった。オゾン層の破壊を原因とする異常気象による地球の危機が書いてあるのだが、改めて再読すべきと思う内容だった。地球環境問題の重要性を感じるとともに、この書籍との再会を通してデジタル化が進む社会についても思うところがあった。学生時代から貯めこんだ建築雑誌も処分しきれていない。再び読むことはないだろうなと思いつつ、これらの本も背表紙を見ると中に掲載されている建築が蘇ってくるのである。部屋の中に置かれてある背表紙のタイトルだけが見えている紙書籍は、間違いなく自分の所有物として存在し、部屋の空間を構成している重要な要素になっているようである。

利便性、効率化が進んでいる現在、電子書籍で本は読めるし、見てみたい建築はPCを開けば瞬時に出てくるし、保存も簡単であり、保管場所を考えず処分する必要もないのである。デジタル化の必要性を認識しながらも、紙書籍の表紙・タイトルの文字を見て、ほんとにぬくもりを感じる自分がいるのである。

過去を振り返れるアナログの部分は、まだまだ必要なのではと思えてならない。